



TITLE:

外国の大学図書館 ポーランドにおける大学図書館の四季

AUTHOR(S):

中山, 昭吉

CITATION:

中山, 昭吉. 外国の大学図書館 ポーランドにおける大学図書館の四季.
静脩 1967, 4(4): 4-5

ISSUE DATE:

1967-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36423>

RIGHT:

ポーランドにおける大学図書館の四季

中山 昭 吉

○ 大学制度の起原と発展そのものが日本と異なる事情から、西ヨーロッパと同様に、東ヨーロッパの大学図書館の雰囲気そのものも、かなり日本と異質なものを感じさせるのは当然であろう。

新学年の開始は紅葉の秋である。大学構内の中心にあって、大木に囲まれた図書館附近の白いベンチが落葉に彩られる頃ともなれば、学生たちが肌寒い木枯らしに吹かれて、自然に誘いこまれる殿堂ともいうべきものが、私のワルシャワ大学図書館にまつわる印象の一つである。

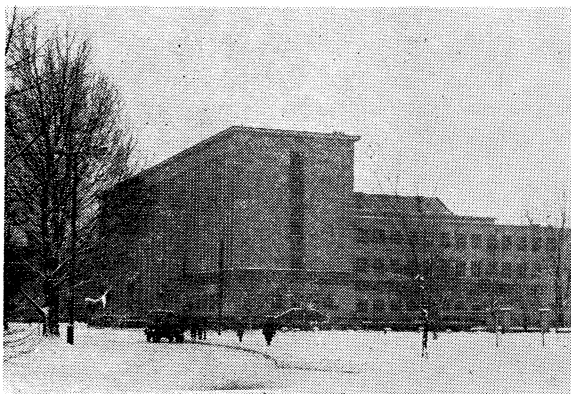
19世紀初頭に建造された図書館は、16世紀に創立された大学の中では比較的新しいものであるが、悲劇にみちたこの国の歴史の重みが扉を押す者の手に重く感じられる。まず貸出事務所、カード室、トイレがあって閲覧以外の最低の用件が満足されるが、階上の閲覧室に入るにはオーバと帽子などの筆記用具とノート以外の携行品を預かり係に手渡して番号プレートを受取る。この際の挨拶や世間話の機会はもちろんのこと、薄暗い階下が身軽になった入館者の服装で花が咲いたような風情は、陰うつな戸外を忘れさせてくれる一瞬である。トイレに行って髪をとくのは女性ばかりとは限らない。こうした雰囲気をかもし出す館内の機能は、入館数分後のわれわれに教会の聖壇にでもきたような壮重な気分を抱かせる。

閲覧室。それは日本と比較して、単調すぎる外界とは反対に、実に変化に富む色彩を発散する小世界という表現が適切であろう。なぜなら、燈火に輝く豪華な蔵書の壁を中心に、多くの女性のアクセサリが趣をそえるからだ。時には修道服あり、軍服あり、白髪の老女性の姿さえもが彩りをくわえる。

さて、こうした光景を展開させるこの国の入館者は学生が大半を占めてはいるが、正規の学生の多数が職場や軍隊に籍を置いていた者であったり、かなり発達した通信教育生であったりして、外観はまったくの街頭でみかける一般社会人である。教職員、大学院生、外国人留学生をも含めて年齢構成の巾が実に広い。私の博士課程ゼミ（ポーランド近代史）のメンバーを例にあげれば、半数近くが女性で、恩給生活の老婦人、大学講師、助手、高校教員、

将校、資料編集所所員、さらに図書館員そのものが常連であったが、これらの人々が入館者の一部を構成するのである。このような現象は、欧米一般に、大学の機能自体が一般市民の成人教育の場でもあるという伝統がもたらした結果といえよう。だから、大学図書館が都市案内書の中で誇り高い名所の一つに数えられても不思議ではない。

○ 戦災後に復興をとげた近代都市ワルシャワにあっては、幸いにも完全な破壊をまぬがれた大学図書館



（冬の日のヤギェウオ大学図書館）

とその周辺は昔の面影を残している。逆に、生きている中世都市さながらの古都クラクフ（クラコフ）の大学図書館は、皮肉といえるほどヨーロッパでも屈指の近代的なものであった。

クラクフ市はポーランド民族の誇る由緒ある文化・学問の都市の名にはじない。1964年に600年祭を祝賀したこの大学は、創立者の国王の名にちなんで「ヤギェウオ大学」と正式に称され、コペルニクスも学んだという講義室や図書室もある。たしか、若い日にポーランドに滞在したド・ゴール大統領が、つい先日、大満悦でこの大学を訪問しているが、たんなる観光的価値以上に、中・東ヨーロッパの名門を誇っており、近代化をとげた大学自体の規模はワルシャワ大学をはるかにしのぐものがある。

霧に煙る冬の夜、王城から旧大学地区にかけて黄金時代のポーランド中世に帰った気分でも市外に向って10分も歩けば、巨大な各学部、博物館、学生寮などと並んだ図書館に達する。ヨーロッパの風雲が急を告げた第二次大戦の開戦の年に完成したこの図書館は、豊かとはいえなかったこの国の、今は国の片隅になった古都にそびえていることとあわせて、あたかも民族の魂の結晶とでもいうべき、ある一種の宗教的モニュメントの感じを与える。

大学の案内書によれば、蔵書数は約150万を数え、さらに、70以上の各学科図書室の約65万にのぼる書籍の管理にあたる中央大図書館である。

春が訪れて、復活祭の後には、試験や論文で学生のざわめきが廊下によみがえるが、私には冬の夜、激動の世紀に残ったこの国の古都の星空を眺めつつパンをかじっては、またしても暗い閲覧室に消えていった若人の後姿が異様に想い出されてならない。歴史の現段階でも、風雲に耐えつつも知的活動を支える宝庫ともいうべきものが図書館であるということを痛感できたことは私の貴重な体験の一つである。（編集者註：中山氏は昭和31年に本学文学部西洋史学修士課程修了後、昭和37年より同41年までポーランドに3年、オーストリアに約1年留学されました。現在京都産業大学講師）



—— 展 観 ——

「維新資料展」開催

—— 尊攘堂遺品より ——

読書週間にちなむ秋期恒例の展観は、さる11月7日から同10日までの4日間、本館陳列室において開催された。今回の展観は表記のごとく「維新資料展」と銘うって、本館創設時より伝わる「尊攘堂」遺品を陳列したもの

である。

この「尊攘堂」遺品については、年輩の方はご存知であろうが、維新の志士の一人で、のちに内務大臣となった品川弥二郎元子爵が、同志であった人々に関する資料と、彼等からその節義をしたわれていた先人たちに関する資料を収集して、本学に寄せたものである。

今回は、特に今までの展観で陳列されたことのなかったものを中心に選んで御覧に供した。

貼交屏風、貼交書幅など、幕末の志士が品川にあてた書簡を貼りまぜて、屏風や、幅にしたもののほか、高杉晋作の大型肖像額、品川弥二郎木像、水戸烈公撰の歌かるたなど合計31点を陳列したが、多くは20才台で若い生命を散らした志士たちでもあり、熱心にその筆跡に見入る観覧者で連日にぎわった。